

平成28年度第2回野田市社会教育委員会議

日 時 平成29年2月23日(木)
午前10時00分から
場 所 野田市川間公民館 講堂

《次 第》

- 1 開 会
- 2 委員長挨拶
- 3 議 題
少子高齢社会の社会教育について
- 4 報告事項
(1) 平成29年野田市成人式開催状況について

(2) 川間公民館の開館について
- 5 そ の 他
会議録等のホームページ掲載について
- 6 閉 会

議題

少子高齢社会の社会教育について

少子高齢社会の社会教育について

(前任期社会教育委員意見まとめ)

1 現状、課題、コミュニティ形成の必要性

- ・幅広い年齢層のコミュニティの場が必要。
- ・場を作り、その支援を行う。
- ・公民館活動においても、子どもと高齢者それぞれの活動が見られるが、二極化され、必ずしも交流の場となっていない。
- ・核家族化が進み、家族構成が両親に子ども1～2人、高齢者夫婦、一人暮らしの高齢者等、家庭内においても異なる年齢層の交流が限定されている。
- ・様々な生活場面において、幅広い年齢層の交流が望めない現状がある。

2 幅広い年齢層を保有する既存団体から見るコミュニティ

※ 社会教育委員が直接関わりを持った団体活動からの例示

- ・バップカ獅子舞保存会
伝統の継承という意義から地域の誇りと歴史を伝え、郷土愛を育む。
- ・ボーイスカウト
野外活動を通じ仲間同士の信頼感、自然にふれあう大切さと畏怖を学ぶ。
- ・野田市釣会連合会
趣味を通じた集合体であり、子ども達を対象とした釣り大会や釣り教室を開催する。
- ・地域のジュニアチーム
指導者と所属する子ども達、その家族との交流の他、地域で活動を長く続けている中で、親子を含めた幅広い年代が地域との連携感とともにつながる。
- ・地区の消防団
地域防災の要。地元根差し、地域のつながりが特に深い団体。

共通する団体の利点として、

- ・幅広い年代の人が関わっており、経験や知恵・技能を持った年長者が、若い世代にその知恵や技能を伝えていく縦のつながりとともに、各年代の横のつながりをもつ。
- ・年長者はその知恵や技能について生きがいや誇りをもち、若い世代は、年長者に尊敬の念を抱いている。
- ・子どもの指導・育成に携わる大人が生きがいをもち、子どもの活動を機に地域へのネットワークを広げていく機会となる。

- ・子どもが学校や学年が異なる子との交流を深め、かつ多くの大人と関わる経験を得る場となる。
- ・団体のつながりの深さから、意思の疎通が早く、地域のコミュニケーションの中核となり、防災や防犯にも役立つ。

3 提案

・公民館活動

公民館講座や公民館活動を通じて培ったスキルや、仕事等においてこれまで培ってきたスキルを生かし、青年層や子ども達にそのスキルを伝えていく、あるいは交流の場を作り出していき、その人材育成も含め、多目的な可能性を秘めた場所づくりをしていく。

・文化活動

高齢者から子どもまで、異なる年齢層に対する合同のスケッチ会、美術鑑賞会、音楽鑑賞会等の実施。野田美術会等、地域で活動する団体の協力や支援を通じ、年齢差を問わないコミュニティの場を創出していく。

・「サタデークラブ」の活用（青少年教育と社会教育の融合）

現行のサタデークラブのように大人が子どもを指導するだけではなく、地域の高齢者と子どもと一緒に活動に参加する。

・学校の部活動等の小中学生の団体と地域住民の交流

学校の部活動、ジュニアチーム等スポーツや文化活動に取り組む小中学生の団体と地域住民が交流する機会を作る。

公民館活動やクラブチームで活動する大人が中学校の部活動やジュニアチームの練習に参加する、あるいは大人の練習に小中学生が部活動単位で参加したりするもの。保護者の参加により、三世代の活動展開も期待できる。

競技によっては、大人が子どもに挑戦することも可能。

・イベントの開催

「教えられる、教えたい」得意分野や関心を持ち寄り、テーマに関心を持つ市民が訪れ交流する場、B級グルメの知恵版。屋内施設等に展示ブースを設置し、出展者は年齢を問わない。例えば、スマートフォンの使い方等を中学生が高齢者に教える、ゲーム・パズル等で大人と対戦する等、地域の「知恵の輪」のつながりを深める場を創出。

・「市民性教育」を学ぶ環境醸成

一人ひとりが社会の一員として参加しながら自己実現を図り、社会や人々が抱えるさまざまな課題に向き合い、協力し合って暮らしやすい社会を作っていくための資質と能力の育成、共同体の一員としての義務的役割を持つ「やわらかな行為責任」を持てるようにしていくことが大事（森田洋司「いじめとは何か」2010年より）であり、学校と地域の更なる連携の中で、「市民性教育」を学べるよう工夫していく。

社会の仕組みを幼少期から知る機会を作り、ボランティアなどの体験を通し、能動的に社会に関わっていけるとよい。

個人個人が仕事のやりがい、生きがい、他者からの正当な評価や期待を受け、自己肯定感、自己有用感が育まれることにより、他者への思いやりと信頼に基づいた人間関係を結ぶ力となる。それが集団を大事に思う連帯感や帰属意識につながり、結果としてよりよい社会を作る基礎となるだろう。

社会教育委員としても、この視点を持ちながら、学校、地域に関わっていくことが重要である。

・社会教育委員として

少子高齢社会を踏まえ、誰もが使いやすい環境づくりに配慮したユニバーサルデザインの考え方も考慮し、地域や行政と共に一歩ずつ前進する役目を果たしたい。

少子高齢社会の社会教育について

1. テーマの設定について

高齢化が急激に進む中、高齢者が地域で自立して暮らし続けることや市民一人一人が自らの健康の維持増進に取り組むための支援が課題となっております。このような高齢者へのきめ細かな対応が求められている。加えて、元気な高齢者が社会参画、生きがいつくり等を促進させ、社会保障費の増大を抑制していく視点も重要である。

子どもの健全育成と子育て環境の充実ですが、ライフスタイルの多様化や女性の社会進出等に伴う未婚化、晩婚化、晩産化が進行しています。また、景気の先行きが不透明な社会情勢の中で、就業、所得の将来へ不安感、子育てへの負担感等も増大しています。少子化は今後も続くことが予想され、そのため、若い世代が、仕事と家庭を両立でき、安心して子供を産み育てられる環境づくりが求められている。特に、子育て中の親が安心して働くことのできる環境整備や保育環境の充実等が重要である。また、子どもの健全育成に向けて、地域が一体となって子どもの育成に関わることのできる仕組みづくりが重要である。

(総合計画より抜粋)

1 現状

- ・高齢者対象、子ども対象と、それぞれを対象とした取り組みはあるが、別々に行われている感がある。若い世代を取り込むには、一緒に活動できる場が必要。
- ・学校においても、学校支援地域本部やサタデークラブ、公民館の学び舎など、地域の高齢者との関わりは多い。野菜づくりを始めとする農業体験や郷土芸能等の支援といった協力関係が築かれている。
- ・学校教育、社会教育とそれぞれの枠組もあるが、今後益々連携を図っていかなければならない。

2 中間年齢層の不在（世代の中抜け）と団体規約の見直し

- ・高齢者団体においては、後継者が育たないという後継者問題を抱え、子どもを対象とする団体においても、子どもが集まらないという課題を抱えている。
- ・子どもを対象とする団体について、どの団体もイベントや催しを一生懸命行っており、受け皿は多い。子どもが少なくなっていることから、子どもの奪い合いとなっている。
- ・子どもを対象とする団体については、規約を見てみると、昔のままというところが多い。子どもがいると、その親が役員になるという内容のものも多く、親世代が忙しい中で、役員や指導者的役割を果たすことが難しい状況となっている。
- ・親が何らかの役割を担わなければならないのであれば、うちの子は参加できないとなり、結果、子どもが集まらず、また、真ん中の年齢層の指導者がいない中抜けの状態となっている。
- ・高齢者の生涯スポーツの観点から実施される日帰りのスキー教室においても、孫を連れて参加する方がいたが、それも6年生くらいまでで、中学生になると部活や学校行事等で参加できなくなる。
- ・サタデークラブも同様で、4～6年生になると参加が減っていく。
- ・世代間の交流が希薄であり、若い親世代を取り込むためにも、従来の規約やルールを思い切って今のものに見直し、改善していくことも必要である。

3 後継者の育成

- ・少子化の進行という他に、実際にやる人間が減ってきている。かつては、学校教育において、展覧会や教育映画を観る機会があったが、芸術作品等を子ども達に見せることも重要である。
- ・例えば絵を見ることによって関心を持つ子が出てくる。それがきっかけとなり、指針を得て、部活等もその方向に進むなど、その後、その子が後継者となる得る可能性を秘めている。
- ・例えば、野田市の文化祭を学校の授業で取り入れるなど、そうした機会を学校教育に取り入れてもらうことで、いろいろな趣味や技術に触れ、子ども達が目指すことにつながっていくのではないかと期待している。
- ・学校教育に取り入れることに関して、移動に時間を要する距離の場合は難しい面がある。逆に、学校にきていただく、近距離である場合にはカリキュラムに取り入れることは可能だろう。
- ・サタデークラブ（生け花）においても、生けた花を子ども達にスケッチをさせている。形も覚えられ、花の名前も覚えられる他、描くことを積み重ねていくことで、何らかの興味関心を抱くようになるのではないかと期待している。

4 各団体との連携

- ・各団体、一生懸命活動しているが、団体間の連携を考えていくべき。
- ・すでに連携している場合にも、安全面やお金の問題等から、やりにくさがある。
- ・管弦楽団の活動においては、グローバル化時代にふさわしい子ども達の育成を目的に、ドイツの子ども達との交流を行った。いろいろな団体に呼び掛け、団体によっては協力を得られたが、スポーツ団体の協力は得られにくかった。
- ・各団体の連携の在り方、巻き込み方に工夫が必要となる。
- ・行政との交流も、各市温度差がある。行事を運営していくための人やお金という問題については、どのように関われるかという課題がある。

5 活動の工夫、見せ方

- ・青少年相談員で、昨年、県でダンスのイベントを行ったが、予算がなく、子ども夢基金を利用した。夢基金から100万円、全相談員から300円を徴収し、120万円を予算として実施。売店等の売上で資金の確保しようとしたが、各市によって販売に対する判断が異なる。
- ・お金の工面については、公の団体の場合、一切認められないことも多い。営利を目的とするものではないので、ものによっては、多少のルール改正も必要となるのではないか。
- ・一方で、お金を掛けずにどのように取り組むか、どう工夫していくか、ということも問われてくる。
- ・各団体の活動をPRする必要があると考えている。
- ・活動を見せるということの重要性も考えるべき。サタデークラブの舞踊を、文化祭で、日舞連盟の枠で参加させたところ、子ども達が毎年楽しみにするようになった。衣装、予算の問題もあるが、なんとか今日のかたちができる。
- ・サタデークラブについて、運動系については、試合等があれば連帯感が生まれるということを知ることが、室内の活動においては、なかなか見せる場がない。あっても、保護者のみという現状で、非日常的なことをやっていて、広く一般の方に、見てもらう機会がない。
- ・サタデークラブの剣道、バドミントンは連盟等にサタデークラブ枠といった特別枠を作ってもらい、試合に参加するなど、横の連携を図っている。
- ・子ども1人に、うしろ10人と言われるが、いろいろな人が見る方法を考えていかなければならない。
- ・学校単位の観客ではなく、広く浸透していくような見せ方、工夫が必要。文化祭においても、観客はやっている人ばかりで、全体的な観客数は減ってきているのではないか。
- ・北部地区の社協フェスティバルにおいても、自分の子ども達が終わると出て行ってしまい、総入れ替えとなってしまう。
- ・子どもの指導だけではなく、見る側の姿勢も気に掛けることが必要。見る姿勢について、4割程度の人に伝えるだけでも改善されてくる。

<参考データ>

野田市の高齢化率の推移

	総人口 (人)	65歳以上の占める割合		備考
		(人)	(%)	
平成15年度	153,266	23,763	15.50	※合併
平成20年度	156,683	30,148	19.24	
平成25年度	156,725	38,150	24.34	
平成27年度	155,405	42,603	27.41	※10/1現在

高齢化社会	高齢化率	7% - 14%
高齢社会	高齢化率	14% - 21%
超高齢社会	高齢化率	21% -

野田市の成人式対象者数の推移

	対象者数	備考
平成16年	2,174	※合併
平成21年	1,791	
平成26年	1,577	
平成28年	1,564	

野田市の小中学校児童生徒数の推移 (見込数含む)

	小学校 (児童数)	中学校 (生徒数)	合計	備考
平成22年度	8,355	4,082	12,437	
平成23年度	8,375	4,105	12,480	
平成24年度	8,375	4,037	12,412	
平成25年度	8,476	3,969	12,445	
平成26年度	8,394	3,985	12,379	
平成27年度	8,382	4,002	12,384	
平成28年度	8,349	3,968	12,317	
平成29年度	8,241	4,045	12,286	
平成30年度	8,147	4,097	12,244	
平成31年度	7,811	4,301	12,112	

1 現状

- ・2025年問題は、野田市も例外ではない。日本は全体的に人口が減少しており、4人に1人が後期高齢者となる。先進国の中で、これほど減少している所はない。国家の静かなる有事、政治課題の一つである。市政全体の大きな問題として、社会教育としてどう参画していくのか、それに対応した取組ができるのか、その視点に立った活動が重要である。

2 地区の取り組みと実感としての少子化

- ・[福田地区] 地区社協が一つなので、いきいきクラブや女性会、体協、青少年問題、学校等が一つになって、学校支援や子どもに関わる活動をしている。児童数、生徒数は確かに減少しているが、学校は落ち着いて、温かな環境で教育が行われている。子どもが少なくなって、高齢者が増え、中間の親世代が忙しい中で、元気な高齢者が積極的に子どもたち、孫世代に関わっていくことが大事である。
- ・[下町] 昔からの古い町並みであるために、地所が少ない。商店街については親世代が現役のときは、親子二代で住んでいたが、高齢化でお店を閉めてしまうと、次の世代がいいため、空き家になってしまう。子ども会も人が少なく、高齢者が中心に行事を行っているが、人がいない。祭りにおいても、本当の意味での町内の人間は少なく、自分の縁続きの人を他から連れてきて行っているのが現状。
- ・[上花輪(太子堂)] 新しい世帯が増え、確かに若い人が増えている。子ども会を組織しているが、減っている印象はなく、落ち着いてきている。その反面、核家族化により若い世代が家を出て、空き家になっている所が散見しているという問題も発生している。地区での異世代間交流については、地区の運動会や地区社協等の活動において、学区となる中央小学校と第二中学校と、継続的な連携を図っている。
- ・[中央小学校区]子どもの増減について、一時に比べると減っているが、それほど激しい変動は見られない。

3 少子化の中の貧困格差

- ・負の連鎖と言われる貧困の問題について、貧困の家庭で、経済的な理由から、学校外の教育の機会が与えられないことによって、貧困から抜け出すことができないという事例は非常に多くある。
- ・野田市は、他市に比べて、必ずしも貧困率が高いとは言えないが、ひとり親家庭等を、どう支援していくのか、子どもたちにどう学力を付けていくのかということが課題となっている。
- ・市としては、ステップアップセミナーという名称で、福祉(生活支援課)が主となり、公民館等を会場に、1週間に1回、夜に勉強する機会を提供している。その他、土曜授業を実施するなど、学力の底上げを図っている。

- ・格差ということが社会問題化しているが、社会教育においても、それに対応して、どうカバーすることができるか等、活動の場所があるはずで、野田市も含め、全国的にも、学校支援地域本部事業や学力支援等で、地域で取り組んでいる事例は多い。

4 団体の世代間交流の取り組み方

- ・イベントを行う際に、市や教育委員会の後援も活用するのも一つの方法であるが、他の団体と連携する等、どのようにいろいろな人を巻き込んでいくかということを考えることが重要。集客の層が変わり、結果的に、世代間の関わりが図られるといった新たな効果が生まれる。
- ・学校教育においても地域との連携は柱になっている。生活科単元、総合単元等で体験活動を実施しているが、教員に実経験がないことが多く、地域の方の協力なくしては実施が難しい。指導者の紹介については、公民館や地区社協の協力を得ている。個々の団体イベントに、その都度学校で参加することは難しい現状にあるが、教育課程に組み込みながら世代間交流や地域との連携を図っている。

5 居場所づくり

- ・現在の学校は、子どもの安全を最優先としていることから校門が閉められている。子どもの安全を守るためにゲートを閉めるのが良いのか、地域へ開放するのが良いのかという議論は相当の数で行われているが、なかなか理念どおりにはいかない現状がある。
- ・余裕教室等、学校の敷地の一部を地域に貸し出す事例もある。地域の高齢者が集まる場所として、そこで自分たちの活動を行う他、子どもたちの見守り活動も併せて行ってもらおう。授業の妨げにならない等、一定のルールの下、子どもたちの見守り隊のような地域ボランティアの組織ができ、学校をカバーできる体制作りができれば、有用な方法であり、場所となる。
- ・野田は登下校の見守り、交通整理の活動をよく見かけることから、こうした組織との連携等、空いている学校の活用については、まだまだ工夫の余地があるだろう。
- ・空いている所の有効活用の他、財政的な課題をクリアできれば、児童センターといった施設の充実というのも一つの方法である。子どもたちが自由に遊べる場所が市内に幾つかあるとよい。
- ・高齢者が、集まる場所は比較的恵まれているが、就学前の子どもが遊べる場所、仲間づくりができる場所というのは、野田市は少ない。就学前の子どもたちを抱える保護者が集まれる場所ができれば、仲間づくりにつながり、そこからいろいろ進んでいくのではないかと。
- ・公民館の事業としては、家庭教育学級を開設しており、幼児コース、小学コース等、保護者を対象とした講演や実技を取り入れた内容となっている。かつての講座として、曜日だけ決めて、何をするかは特に決めず、公民館の和室に、ただ親子で集まって過ごすという公園デビューのような、つながりづくりの事業を実施したことがあるが、少子高齢化社会という視点において、事業展開を検討していくことが必要。

- ・公民館の他にも、自治会館、空き家、学校施設等、土地の有効活用という視点も含めて、「何々だからできない」ではなく「どうやったら活用できるか」という発想の取組が必要である。
- ・児童センターのような施設についても、空き家の利用というような対応が可能かもしれない。

- ・関わりづくりが社会教育活動の大きな核となる。人間づくりをどう進めていくか。利便性を追求する傾向が強まり、公共心、公的な意識の希薄化が少子化、高齢化社会の課題として存在する。

1 団体や行事への取り組みと高齢化

- ・[女性連協] 女性連協の活動と各地区の活動があり、年間を通して忙しく活動している。年齢層で多いのは、50代、60代だが、地区によっては、30代、40代の方が多いところもあり、逆に70代、80代の方もいて、幅は広い。昔はもっと女性団体が活躍していたというのを見て、もっとやらなければいけないと考えている。活動の規模は縮小してはいるが、支部組織に加入して活動することが、個人の健康や生きがいがいづくりにつながっている。
- ・[興風会館] いろいろな団体やサークルに利用いただいている。高齢化の問題については、ひしひしと感じている。高齢化で、どのサークルもだんだん数が少なくなっている。このままいくと興風会館を利用してもらえなくなるのではないかと、サークルの数も減ってくるのではないかとという危機感を持っている。各団体やサークルには、若い人を取り込む取組をやってほしい。興風会館としても、若い人にたくさん来ていただけるような催しやイベントを考えていかなくてはならない。小中学生や高校生の中には、まだ1回も来たことがないという人もいるだろう。そういう人が、1度、2度足を運んでいただくことで、大人になったときに思い出しながら足を運んでもらえるよう、そのための手立てを検討していかなければならないということで、いくつか行事の見直しを行っている。高齢化、格差という視点も含めて時代に合った行事の見直しをしている。
- ・[踊り七夕] 地域の伝統行事である踊り七夕について、高齢者の参加が多い中、次世代に伝承していくことが私たちの務めということで、教育長のご協力も得て、今年初めて、中央小、宮崎小、柳沢小、清水台小の4校から小学生が110人ほど踊りパレードに参加することになった。この活動の中で、子どもと高齢者、子と親をつなぐ形ができた。夕方の稽古への送迎で、はじめは母親が多かったが、徐々に父親も増え、次第に親も子どもの後ろで踊るようになっていった。家庭に帰っても、親子で踊ったという共通話題ができたということで、思わぬ効果があった。最近では、祖父母も来て一緒に参加する等、次の世代に引き継がれる要素ができたと喜んでいる。竹飾りについても、市からの予算が厳しいということで、私たちの世代でできるものにしよう、次の世代に向けて変えていこうという意識が芽生えてきて、つながりが出てきている。
- ・[学校] 二ツ塚小では、高齢者の方とのふれあいということで、例えば、1、2年生の生活科の授業の一環として、けん玉やコマ回しなど昔の遊びを2年生が1年生に教える際に、地域の高齢者に協力をいただいている。近くに田んぼを貸してくれるところがあり、毎年田植え等の体験に多くの方に来ていただいているが、段々規模が小さくなってきている。やはり高齢化で次を引き継ぐ方がいないという現状がある。その他、運動会では、高齢者の方を招待して、玉入れを一緒にやるなど、できるだけそういう機会を持って、学習の中で地域の方と結び付けていけるように工夫しなければいけないと考えている。

- ・[学校]福田第一小でも、おはやしクラブがあって、民俗芸能のつどいに参加する等して、地域にある伝統芸能についても、学習の中で、子どもたちに引き継いでいけるものがあると思う。
- ・[PTA]社会的に少子高齢化というとマイナスなイメージがあり、催し等をやると人数を集めなければならず、現役世代や子どもが少ないのでなかなか集まらないということで苦慮されていると思うが、逆の考え方で、現役を退いた方の人数が多いので、子どもに目を配れる、力を注げると考えている。それは、次の世代である小学生、中学生に教育できる絶好のチャンスなのではないかと考えている。とはいえ、現実には、親の世代、30代、40代は共働きをしなければならず、PTA活動にもなかなか参加できない。先日、祖父が孫の学校のPTA副会長になるという内容の小説を読んで、現実的にどうかは別にして面白いと思った。高齢化とともに核家族化も進んでおり、親の世代が忙しいなら、その上の世代にもっと協力していただければいいのかなと思った。
- ・[母子寡婦福祉会]今度母子父子福祉会と名称が変わると思うが、現在250人程の会員がおり、70代の世代がほとんどとなっている。このうち父子は2人で、もっと入ってほしいと思っている。キャンプ等の行事でも力仕事ができず、男性の力がもっとあると良いと思うが、単身の高齢の男性が入ることには抵抗があるようで、なかなか集まらない。両親がいる家庭でも共働きで生活しているが、ひとり親の場合は、昼も夜も働いていて、日曜日に子どもと集まりましようと言っても集まれない状況にあり、ひとり親の方をどう引き留めるかという課題がある。
- ・ひとり親については、学校でも多く見受けられ、仕事のため近くの祖父母に任せるということもあり、子どもが具合悪くなったときに連絡するのは祖父母というケースも多い。

2 活動の中の工夫（人集め、予算等）

- ・流山市の文化会館で蓮池薫さんの講演会があったときは、満席で当日断られるほどだった。手伝いで関わったが、人集めは、とても大変である。3か月前からPRし、新聞も取り上げてくれた。入場料についても、高いと集まりにくい、安くても集まらない場合もあり、このときは千円で、手頃だったかもしれない。また、講演だけではなく子どもの音楽も入れたが、その団体にチケット100枚が売れた。人集めで、どのように周りの人を巻き込むかということについて、子どもが来ると親がくるというのが、一つのヒントとなった。
- ・野田市郷土博物館で、郷土玩具展が行われていて行ったが、30分くらいいて、私一人だった。張り子の展覧会で、あれだけ素晴らしい内容で、立派なチラシもあるけれども、なかなか人が集まらない。その他、書道、美術会関係等、参加させていただいたが、その中で感じたのが、会の連携がよく取れているところは、人が集まっているということ。全体的に高齢者が多かったが、よく集まって工夫されていると感じた。

- ・[美術会]親子スケッチ会の計画を立てたが、人集めや日時、学校行事との兼ね合いをどうするか等、様々な問題があり、計画を立てたものの計画途中で休止している。この先実行するために、一つ一つ解決していかなければならない。
- ・[文協]東葛飾文化祭について、今年は野田市が当番市だった。内容は多岐に渡り、作品展示、舞台公演等あるが、少子化ということのを忘れるほど、たくさん子ども達が演技していた。野田市もサタデークラブの皆さんが演技していた。その他、野田市からは31団体（文協に加盟していない団体も含む）が参加した。
- ・(先程お話があったが)少子化ということで、一人当たりに注がれる指導が、大勢の人数で受けるより一人一人が受けられる量がとても増えるので、今はチャンスの時期だと思う。
- ・[青少年相談員]活動時の会場借用については、野田市は減免が効いており借りやすいが、東葛地区での行事となると、減免がないところも多く、予算の問題が出てくる。
- ・[美術会]高齢化していることもあり、絵を展示する際にも、業者の方をお願いしている。
- ・活動に当たっては予算が必要で、共催となると、その時は比較的抑えられることもある。いろいろな催しがあり、ピアノ一つ借りればできるものもあれば、大きなものを借りなければできないものもある。行政側については、どのようなものを、どのように支援し、振興していくのか、今後の課題として残る問題である。

3 誰もが活動できる環境づくり・居場所づくり

- ・年配者は、健康を維持していくことをよく考えている。元気な方は遠くまで行く。しかし、そうでなくなった場合に、地元にある自治会館までも行けないという人がいる。そういう方の健康維持については、どのようにしていったらよいのか。移動に困難を感じる、困難である方が活動できる場所を用意するという必要ではないか。
- ・少子高齢社会における社会教育ということでは、各地区の公民館でいろいろな講座を開いており、元気な方はそこに参加できている。公民館以外でも民間その他で教育事業を行っている。高齢者の社会教育というのは、ある程度充実しており、本人が求めれば得られる状況にある。
- ・他市に比べ、野田市は公民館が多い。しかしながら、公民館まで出掛けていけない人達が多くなっているのも事実である。
- ・まめバスもあるが、まめバスよりも小さい車で、地元の公民館に向けての交通手段があるともっとよい。「車出すよ」と言ってくれる人が80歳を過ぎた方であったりする。交通手段に関する事は、もっとやってほしい。

- ・いろいろな市でバスがあるが、総乗り入れすることはできないのか。総乗り入れができれば、まちの活性化につながるのではないか。バスもコンパクトにして、リースを増やす工夫という手立てができるとうい。
- ・少子化に関しては、他市に比べて公園が少ないように感じる。緊急避難時に集まるところは確保されているが、子どもが遊べる公園は少ない。児童公園はあるが、それは児童のための公園で、若い子どもが遊ぶには危険が多い。遊具等は何もなくてよい。安心して遊べる公園があるとよい。
- ・都内等では、子どもの声がうるさいので公園を作らないでほしいという陳情があるとも聞いている。公園を作ること自体が難しいという状況もある。

平成29年成人式の実施報告について

1 開催日時 平成29年1月9日(月・祝)
 受付 午前10時
 開式 午前10時30分 終了 正午

2 会場 野田市文化会館

3 参加者数 1,131名 69.6% 内訳 男性608名 女性523名
 該当者数 1,624名 内訳 男性876名 女性748名
 (参考)

	平成29年	平成28年	平成27年
男性	608名	562名	547名
	69.4%	67.5%	63.2%
女性	523名	542名	557名
	69.9%	74.1%	72.7%
計	1,131名	1,104名	1,104名
	69.6%	70.6%	67.7%

4 内容 記念式典

- ①開式のことば
- ②国歌斉唱
- ③市民憲章唱和
- ④教育長挨拶
- ⑤市長祝辞
- ⑥市議会議長祝辞
- ⑦来賓紹介・祝電披露
- ⑧記念品贈呈
- ⑨新成人のことば
- ⑩ビデオレター上映
- ⑪閉式のことば